食人学園
核戦争後、校舎の地下施設で
食肉として貪り食われる美少女達
作者　大黒達也

官能人肉小説『食人学園』

一．はじめに

近未来の日本。アジア征服を目論む中国との核戦争により、東京都内にあるX学園の生徒達は、学校の地下に造られたシェルターに閉じ込められる。

学内では、生徒達による食糧や美少女をめぐって、権力闘争が繰り広げられる。

凶暴な性格の総番長達により、狩集められる美少女達や美人教師達。彼女達は、激しい陵辱の末に、食糧として……

二．登場人物

倉木（くらき） 隆一（りゅういち）

若い女性をレイプしようとしていた暴力団員五人を素手で病院送りにした武道の達人。身長百八十センチ以上の長躯と、全身バネのようなしなやかで、強靭な肉体の持ち主。ルックスも良く、正義感もあるが、猪突猛進という欠点も持っている。

香月（かつき） 里奈（りな）

校内一の美少女。コンピュータ技術に

精通し、コンピュータを駆使し校内システムに入り込み様々な情報を入手する。
気は強いほうで、思い込んだら何が何でも実行しなければ気が済まないタイプ。
悪に対しては、断固立ち向かう勇気を持ち合わせている。

桜井（さくらい） 美佐（みさ）、狩野（かりの） 里香（りか）

里奈に劣らぬ程の美少女達。普段は隆一のオッカケをしている。ふたりとも素直で正義感が強い。

工藤（くどう） 亮介（りょうすけ）

X学園の総番長として、生徒達から恐れられている存在。地元暴力団組長の息子であり、校内に拳銃やドスを密かに持ち込んでいるとも噂されている。
冷酷で凶暴な性格。校内の食糧と美少女達や美人教師を我が物にしようとして、隆一達と対立する。

三・本編

プロローグ

西暦二千＊＊年、中国は台湾を平和的な手段で併合し、東シナ海全域を支配しつつあった。武力を使用しない侵攻に対し、米国や日本は何も為すすべがなかった。

中国による台湾併合は、日本のエネルギーや物資輸送の大動脈であるシーレンに多大な影響を与えつつあった。

日本政府は中国との戦争に向けて、準備を始めていた。そのひとつが軍事工場や高速交通網を大深度地下に建設するというものであった。それらの施設以外には、学校などの公共施設も地下に建設し、中国による核攻撃に備えようとしていた。

東京都内にある男女共学のＸ学園もそのひとつであった。季節は冬、寒々とした二月の中旬。学園に通う一部の生徒達は、大学進学に向けて土日も学校に出ていた。校舎は新築間もないものであった。外部から眺めると、木々が繁茂する公園にしか見えない。敷地の片隅に目立たないように、地下校舎に繋がる入り口が見

えていた。

三年Ａ組の男子生徒一名と女子生徒二名が、窓も無い廊下を歩いていた。少年は身長が百八十センチ以上あり、四肢が長く目鼻立ちが整っていた。美丈夫といえるだろうか。美しいだけではなく、全身からオーラのようなものを漂わせていた。少年の名は、倉木隆一。中学時代、通りすがりに暴力団によるレイプ事件を目撃し、ヤクザ五人を素手で病院送りにした武道の達人であった。

付き従う少女ふたりも、身長は百七十センチほどで、モデルのように美しい容姿をしていた。ひとりは桜井美佐。もうひとりは狩野里香という名であり、ふたりともミスコン優勝の経験者であった。

少年はポケットに両手を入れ、無言で歩いていた。少女達が笑顔で話しかけても、軽く頷くだけで、決して会話を盛り上げようとはしない。少女達も別に気分を害するわけでもなく、楽しげに少年の背中を見詰めていた。

彼らの前方から、十数人の男子生徒が

ゆっくりとした歩調で歩いて来た。皆、だらしなく学生服のボタンを外し、肩を怒らせながら歩いていた。

「よう、色男。ベッピンさんを二人も連れていいご身分だな」

先頭を歩いていた茶髪の少年が、卑しそうに笑いかけてきた。少年といっても顔立ちや身体つきは、大人と変わらない。身長が百八十センチ以上あり、目付きが鋭く全身から禍々しいほどの悪意を発散させていた。少年の名は、工藤亮介。X学園の総番長として、生徒から恐れられている存在だった。地元暴力団組長の息子であり、校内に拳銃やドスを密かに持ち込んでいるとも噂されていた。

「……」

少年は鋭い目付きで、茶髪の少年を見返した。相手の少年達に緊張が走り抜けた。

その時、校内放送が流れて来た。それは、あらかじめ電子的に合成されたもののようで機械的な口調だった。

「校内の生徒および先生方、至急教室にお戻りください。緊急事態です。我国と中国は先ほど交戦状態に入りました。本

校は所定プログラムにより、閉鎖されます」

「何だって！戦争がオッパジマリヤガッタ！」

校内にいた少年達は一斉に教室ではなく、出口へと向かった。廊下には少年達の上げる靴音が満ちていた。

大勢の生徒達が出口近くに佇んでいた。出口は、分厚い鋼鉄製の扉によって塞がれていた。

「何で！出口が閉まっているんだよ」

「俺達は閉じ込められたのか？」

少年達が苛立たしげに不平を漏らしていた。

「君達、すぐに教室に戻るのよ」

不安げに佇む少年、少女達をかき分けるように、美貌の女教師が扉の前に出てきた。大学を卒業したての新米英語教師であった。江藤香織。年齢二十四歳。容姿は学校に不釣合いなほど美しかった。ミニスカートからはみ出した太腿が妙に艶かしかった。

「教室に戻って、どうなるっていうんだよ。俺は家に帰りたいんだ」

近くにいたニキビ面の少年が食い下が

ってきた。

「いいから、教室に戻りなさい。校内放送で校長から説明があるのよ」

「校内放送だったら、ここでも聴けるぜ」

総番長の工藤亮介が、いつの間にか、香織のすぐ近くに立って、全身を舐めるように見詰めていた。香織は、亮介の視線に怖気立つものを感じた。

「いいから、言うことを聞きなさい」

亮介をたしなめる香織の声は、僅かに上擦って聞こえた。

「はいはい。わかりましたよ。お前達、さっさと教室に戻りな！」

亮介が周囲にいた生徒達を睨み付ける様に言った。生徒達は雲の子を散らすように各教室に戻って行った。その場に残されたのは、教師の香織と、亮介とその子分達だけであった。

「あなた達も早く、戻りなさい」

「先生。いや香織ちゃん。俺はこの学校のシステムを知っているんだぜ。戦争が始まったら、地上と隔絶されちまうそうじゃないか。ということは、マッポも俺達に手を出せないということだろう？」

亮介は、蒼白な表情で震えだした香織

の両肩に手を載せて、瞳の奥を覗き込んできた。

「……」

「それにしても、いい乳してるじゃないか。吸わせてくれよ」

「兄貴。俺は香織のケツを見たいよ」

背後にいた子分達の間に、薄笑いが広まっていく。皆、一様にだらしない笑みを浮かべながら香織の全身を舐めるように見ていた。

「焦るなって。俺が抱いたら、お前らにも好きなだけ犯らしてやるよ」

「冗談は止めなさい！そんなことして只で済むと思っているの？」

香織の美しい顔は、恐怖のために青ざめていた。

「冗談なんかじゃないぜ。俺は欲しいものは、絶対に手に入れる主義なんでね」

亮介は、香織に抱きつき、ミニスカートをたくし上げ、ストッキングとパンティの隙間から深い尻の割目に手を差し入れて、アヌスを指で刺激した。

「いや！誰か来て！助けて！」

絶叫を上げ、亮介から離れようともがく香織を、亮介と子分達は一斉に担ぎ上

げ、廊下を闊歩していく。

隆一と美佐に里香は教室には向かわず、学校で最も地階である地下三階に向かっていた。

非常灯のみが点灯する階段の踊り場に三人は、少しの間、佇んでいた。目的地である理科実験室に続く廊下は、分厚い防火扉で行く手を阻まれていた。

里香が天井に設置されているＴＶカメラに向かって大きく手を振ると、防火扉はゆっくりと開き始めた。

「最近、随分とご無沙汰しているじゃないの」

廊下の最も奥に位置する理科実験室で、三人を出迎えたのは、黒縁メガネをかけた痩せ型の少年だった。

「何かと、忙しかったんだ」

隆一は、ポケットに両手を入れたまま、目の前の少年に軽く挨拶をした。

「部長、随分とリラックスしているのね。上じゃ戦争騒ぎで大変なんだから」

美佐が、隆一の腕を掴みながら黒縁メ

ガネの少年に話しかけた。部長と呼ばれた黒縁メガネの少年は、物理科学部の部長をしている、田端大輔という名の校内では成績最優秀の生徒だった。

「ここは安全さ。俺が美佐ちゃんのことを守ってやるから」

「なあんだ。加藤君も来てたんだ。私には隆一がいるから心配ご無用よ」

美佐は横から声をかけてきた茶髪がかった長髪で、長身の少年に舌を出して、ぷいと横を向いた。

その少年は、優しそうな笑みを浮かべながら、美佐の横顔を見詰めていた。

加藤紘一も黒メガネの大輔と同様に学業優秀な生徒だった。部員では無いのであるが、大輔の親友であり、部室にはよく出入りしていた。国際的に有名な化学者であり、国立大学の教授である父を持ち、化学には並外れた知識を持っていた。

「あら、里奈ちゃんも来ていたのね？」

美佐同様に隆一にまとわりついていた里香が、部室の奥でパソコンの液晶ディスプレイを覗き込んでいた女子生徒に声をかけた。

「今、ちょっと忙しいところなのよ。中

国共産党本部のサーバにハッキングしているところなの」

セミロングに金縁メガネをかけた才女風の生徒が、ディスプレイから目を逸らさずに答えた。香月里奈。彼女もずば抜けた秀才であり、高校三年生でありながら、情報工学のスペシャリストであった。メガネをかけていて、髪もあまり手入れをしていないが、メガネを外せば、里香や美佐に劣らぬほどの美女であった。

「中国共産党のサーバに侵入して、どうしようというのよ」

今度は美佐が、興味を示したようだ。隆一から離れ、里奈に近付き背後からディスプレイを覗き込んだ。

「軍部のデータベースにアクセスして、攻撃計画を盗むのよ。それが済んだら、ウィルスを仕込んでやるわ」

「そんなことが可能なのか？」

いつの間にか隆一も、里奈の背後に立ち、ディスプレイを覗き込んでいた。

「一年ぐらいかかるけどね」

里奈はディスプレイから目を放し、隆一達の方に振り向き真顔で答えた。

「やめとけよ。今はもっと重要なことが

あるだろう？」

茶髪で長身の加藤紘一が、うんざりしたように言った。

「もっと大事なことって何よ」

里奈が、加藤の顔をじっと見詰めた。

「このパソコンは校内のシステムにも繋がっているんだろう。監視カメラにもアクセスができると聞いたが」

「できるわよ。見たいの？」

「ああ、見たいね。俺達はここに閉じ込められたんだ。工藤達の動きが気になる」

「あんな馬鹿に興味があるの？」

「あいつは、馬鹿だが、喧嘩はめっぽう強い。それに悪党だ。きっと何かを企んでいる筈だよ」

「いいわ」

里奈が再び、パソコンに向かい、電撃の速さでキーボードにコマンドを打ち込むと、監視カメラの画像が表示された。

そこには工藤達が英語教師の香織を運び込んだ体育館内にある倉庫が映し出されていた。そこにいた全員の視線がディスプレイに釘付けとなった。

全裸にむかれた香織が陵辱されている様子が映し出されていた。

13

「ヤッパ。大人の女は違うぜ」

制服を着た亮介が、全裸で仰向けの姿でマットに横たえられている香織の股間から愛液に塗れた顔を上げた。周りでは子分達が、その様子を食い入るように見詰めながら、自らの男根をむき出しにして、呆けた様に自慰を行っていた。床には香織の衣服が散乱していた。

「お願い、もう止めて。許して……」

香織が両手で顔を覆うようにして、咽び泣いていた。

「お前達も舐めるか？浩太。お前ケツの穴が好物だったな。いいぞ、舐めてみろ」

亮介は香織をマットの上に四つん這いにさせ、浩太という名の少年に向けて豊かな尻を突き上げるような格好にさせた。

「いいのかい？」

身長が百九十センチ以上ある、この中では最も長身の少年が、ゆっくりと香織の美尻に向けて顔を下ろしていく。

両手で尻の膨らみを掴み、深い尻の割目を覗き込んだ。そこには無毛でサーモンピンク色のきれいなアヌスが息づいていた。鼻先をアヌスに押し付け匂いを嗅いだ。ウォシュレットを使っているのか、

異臭はしなかった。
亮介による愛撫のためか、膣は濡れており、隠微な匂いが鼻腔を刺激していた。浩太は思わず深呼吸をしていた。香織の匂いを全身で楽しみたかった。
「何ぐずぐずしているんだよ。早く舐めちまえよ」
亮介が香織の膣を指で弄りながら、満面の笑みを浮かべ浩太の肩を軽く叩いてきた。
浩太は、香織のアヌスに喰らいつき、激しい勢いで吸い舐めた。周りで見ていた少年達が、一層激しく自らの男根を擦り始めた。
「いや。そこは止めて！」
香織が背筋を仰け反らせて絶叫した。
「美味しいよ。最高だよ。亮介」
「そうだろう。じっくり舐めてやりな。それにしてもいい乳してるぜ」
亮介は、香織の両乳房を乳絞りの要領で揉みしだいていた。他の少年は、嗚咽に咽ぶ香織の口に吸い付き口蓋を舐めていた。
英語教師の香織が、全裸でマットの上に亮介によって組み伏せられていた。亮

介の黒々とした男根が、香織の膣を犯していた。

寝ていても崩れない盛り上がった乳房を亮介の手が握りつぶした。香織は泣きはらした顔で、天井をぼんやりと見詰めていた。これまで何不自由無く暮らしてきた人生が、音も無く崩れていくのを感じていた。

亮介が「うっ……」という喘ぎ声を上げて香織の膣内に精液を迸らせた。

「先生。最高に気持ちよかったぜ」

亮介は、淫らな笑みを浮かべながら、香織のアヌスを指でかき回した。

浩太が水を入れたバケツと雑巾を持ってきて、精液に塗れた膣を力任せに拭きだした。きれいにした後で、股間に喰らいつき、ガツガツといった感じで膣を舐めた。

香織をうつ伏せにさせて、背後から男根で貫いた。浩太の背後には順番待ちの生徒達が、男根を扱きながら淫らな笑みを浮かべ、談笑していた。

陵辱は限りなく続けられた。二十代前半の瑞々しく、かつ成熟した裸身は、生徒達にとり極上の柔肉にすぎなかった。

貪り性欲の限りを吐き出した。

香織は再び泣いていた。涙が止めなく溢れてくるのを止めることはできなかった。屈辱感とともに激しい快感が背筋を走り抜けた。膣内に精液が迸るのを感じながら意識を失った。

物理科学部の部室では、隆一達がディスプレイで繰り広げられている光景を見詰めていた。

「先生を助けなくちゃ。加藤君。電話で校長に連絡して」

里奈はキーボードを叩きながら、近くにいた加藤紘一に命令口調で言った。

「俺、番号知らないよ」

加藤は黒色のスマホをポケットから取り出した。

「内線電話を使えばいいでしょう。それにもうスマホは、電波が遮断されているから使えないはずよ」

「わかった」

紘一は、内線電話が置かれている机に走り、受話器を耳に当てすぐに戻した。

「駄目だ。通じないよ。いったいどうな

っているんだ」
「ちょっと待って。調べてみるわ」
里奈は、パソコンのキーボードを目にも止まらぬ速さで操作した。
「誰かが、校内の電話システムを使えないようにしたようね。空調や電源設備は問題ないようよ」
「何のために？」
隆一が里奈の背後から、ディスプレイを覗きこみながら尋ねた。
「わからないわ。私達が連絡を取り合うのを嫌っているみたいね」
「俺が様子を見てくる」
隆一がドアの方に向かった。
「私も行くわ」
「私も連れてって！」
美佐と里香が隆一の後に続こうとした。
「駄目だ。ふたりは此処にいるんだ」
隆一は振り返り、二人を両手で押し返した。
「こいつを持って行け」
部長の大輔が、小型のノートパソコンと長さが五十センチ、太さが五センチほどの金属製の棒を手渡した。
「何だ？」

「ノートパソコンには無線ＬＡＮがセットしてある。メールは使えるだろう？それにこいつはレーザ射出器だ」
「レーザ銃ってことか？冗談だろう？」
「玩具じゃないぜ。工作機械用のレーザ加工器を改造したんだ。リチウムバッテリーで駆動する。容量が小さいから十発しか撃てない。しかも、拳銃のような威力は無い。せいぜい、火傷を負わせるくらいだ。だが、目に当たれば失明する。亮介は拳銃を持っているという噂だからな。飛び道具には飛び道具で対抗するんだ。ここが射出口で、これが引き金だ」
大輔は真顔で説明した。
「お前、こんな物を作っていたのか？」
隆一は大輔の顔をまじまじと見詰めた。
「こいつも持っていけよ。それだけじゃ心持とないからな」
加藤が、隆一に手渡したのは、ガンブラックを塗ったモデルガンの自動拳銃だった。
「これはモデルガンじゃないか」
「そうだよ。電動ガス式で連射可能だ。だがな。ただのモデルガンじゃないよ」
加藤は隆一に、掌に乗せた二個の直径

六ミリほどの黒い弾と赤い弾を見せた。
「これはＢＢ弾だろ？」
「見かけはそうだけど、黒い弾は鋼鉄より十倍硬い超合金製なんだよ。それにガス圧を高めているから、貫通力は拳銃弾並みなんだ。こっちの方の赤い玉には、内部に爆薬のオクタニトロキュバンを封入している。ニトロの二倍以上の威力がある。一定以上の衝撃で爆発する仕組みさ」
「お前達、部活で何やってたんだ？」
隆一が呆れ顔で言った。
「皆には内緒にしてくれよ。内申に響くからな」
「そんなもんじゃ済まされないぞ……」
「まあ、いいって。弾装は二つある。黒い方と赤い方にはそれぞれの弾が三十発入っている」
「あと、これを制服の下に着るんだ」
加藤が机の引き出しから、防弾ベストを取り出した。
「こんな物まで……」
隆一は、加藤から防弾ベストを受け取り、制服の下に着た。
「用心のためだ。俺達の中で亮介に対抗

できるのは、隆一。お前だけだからな」
「お世辞を言われたって何もでないぜ」
「香織先生を救うことができたら、里奈を好きにしてもいいよ」
部長の大輔が二人の間に割って入ってきた。
「何言っているのよ。冗談じゃないわ！」
里奈が椅子から立ち上がり、大輔の顔を睨みつけた。
「冗談だよ。お前は俺の女だ。隆一なんかに渡しはしない」
「私がアンタの女だって！誰が決めたのよ」
「そうじゃなかったのか？」
里奈は近くにあったほうきを頭上に高々と振り上げた。
「済まない。訂正する。勘弁してくれ！」
大輔が両手で頭をガードしながら逃げ出した。里奈が両目を吊り上げて大輔を追いかけた。
「気をつけろよ。隆一。亮介は頭がいかれちまったようだ。何をするかわからん。もう行った方がいい」
加藤が、ディスプレイを指差した。画面には、五人目の生徒が英語教師の香織

に背後から抱きつき、豊かで真っ白な尻を抱く様子が映し出されていた。

香織は意識を失っているのか、人形のような動きだった。

隆一は体育館内の倉庫に向かった。片手には加藤から貰ったモデルガンを握り締めていた。体術だけで亮介達を叩き伏せる自信があったが用心のためだ。ドスや拳銃を持ち出してくる可能性が高かった。

体育館の両扉は締まっていた。取手を引いてみたが、鍵がかけられているらしく開くことは無かった。隆一は軽くステップを踏んだ。次の瞬間、疾風とともに前蹴りが大扉に突き刺さった。厚さ数センチ以上もある扉が、吹き飛んだ。

間髪を入れず体育館に走り込んだ。倉庫から物音を聞きつけて、亮介の子分達数名が走り出してきた。ざっと見て、ドスや拳銃を持っている者はいなかった。

隆一が飛び上がり、子分達の頭上から回し蹴りを見舞った。数名が一気に壁際まで吹き飛んだ。皆、一撃で意識を失い床に倒れ付した。

「相変わらず、強いな。隆一。でもこいつには適うまい」
自動拳銃のコルトガバンメントを手にした亮介が、倉庫のドアに凭れるようにして立っていた。
「先生を渡せ」
隆一は、亮介に気つかれぬように背中側のベルトに指したモデルガンの銃把を掴んだ。
「渡して下さいだろう。最も渡す訳無いけどな。いいか、隆一。学校にいるスケはすべて俺様のものだ。センコウだって例外じゃない」
「狂っているな。お前」
「狂ってるだって。冗談だろう。強い者が好き勝手にして何が悪い。いいか隆一。今、極上のスケが十人はいるんだぞ。ハーレムじゃないか？いいことだけじゃないぞ。食糧だって無いんだ。何もしなければ飢え死にするだけだ。美人とまでいかないが、美味そうな女達が二百人もいるんだ。最悪食糧にすればいいさ」
「女達を食べるって。お前、本当にいかれちまったな」
「食うものが無いんだ。仕方が無いだろ

う？それよりお前、俺の子分にならないか？お前の腕なら極上のスケを三人与えてもいいぞ」

「いつまでもほざいていやがれ」

隆一がモデルガンを構えると同時に、亮介のガバンメントが火を噴いた。隆一は胸に衝撃を感じて仰け反った。視線が定まらぬまま、モデルガンを目蔵撃ちに連射した。一発が亮介の右耳朶を吹き飛ばし、一発が拳銃を持っていた右腕を貫通した。亮介は、ガバンメントを落とし、右腕を押さえてその場に蹲った。

「先生を渡せ。今度は汚いケツを撃ち抜いてやろうか？」

その時、床で伸びていた筈の少年が、隆一の足に掴みかかってきた。隆一はバランスを崩して、床に転がった。

「覚えてやがれ。貴様を八つ裂きにしてやるぜ」

亮介は捨て台詞を吐きながら、出口に向かって疾走した。隆一は起き上がり、向かってくる亮介の子分に蹴りを喰らわせた。

「開けてくれ。俺だ」

物理科学部のドアが開き、大輔達部員が隆一を向かい入れた。隆一は両腕で英語教師の香織を抱いていた。香織は意識を失っており、全裸だった。

「先生の衣服はどうしたの？」

里奈が前に出てきて、医師のような目付きで香織の全身をチェックした。

「ナップザックに入れてきた。着させている時間が無かったんだ」

「先生を介抱しなきゃならないな。俺がやる」

大輔が隆一の腕から香織を奪い取ろうとした。

「汚いぜ。大輔。先生の面倒は俺が見るんだ！」

今度は加藤がふたりの間に割って入ろうとした。

「あんた達、男は駄目よ。これは女子の役目だわ」

里奈が大輔と加藤を両手で押して、部室の隅に追いやった。

「私達も手伝うわよ」

美佐と里香が真剣な面持ちで、里奈に近ついた。

「こっちに運んで」

隆一は里奈の後ろに続いた。部室には、もう一部屋繋がっていた。二十畳ほどの部屋にはソファセットやダブルベッドが置かれていた。

「こいつは何なんだ？」

「大輔が、倉庫を無断で改造したの。シャワートイレ付よ。まず、先生の身体をきれいにしなくちゃね」

里奈はいきなり、着ていた制服を脱ぎ始めた。

「どういうことだ？」

「シャワーで先生の身体をきれいにするのよ」

里奈は着ていた衣服をすべて脱いで、隆一の前に立った。豊かな乳房や股間の陰影を隠そうともしない。里奈の素肌は瑞々しく、どこにもシミひとつ無かった。

「俺はどうすればいい？」

隆一は里奈から視線を逸らせた。声が微かに上擦っていた。

「バスルームに先生を運んで欲しいの。あら、隆一。照れているの？」

「……」

「隆一も裸になって。女子だけで先生を運ぶのは大変なのよ」

「俺も裸になるのか？」
「隆一が裸になるの！」
それまで黙って二人の会話を聞いていた美佐と里香が、黄色い声を出した。
「わかった」
隆一は一言だけ言い、香織をベッドに横たえてから、学生服を脱ぎ始めた。美佐と里香も競うように制服を脱ぎ始めた。
「こんなことなら勝負下着を穿いて置けばよかったわ」
「何言っているのよ。隆一は私のものよ」
「準備ＯＫだ」
隆一も里奈同様、素っ裸になった。手足が長く、鍛え抜かれた鋼のような肉体に女達の視線が釘付けになった。股間を軽く押さえていた。女達の裸身に反応してか、大きく勃起していた。
「ワーオ！ここは正直ね」
里奈が隆一の前で中腰になり、食い入るように見詰めていた。今にも手を出しそうな雰囲気だった。
「早く、先生をきれいにしてあげよう」
隆一は女達の熱い視線から逃れようと、全裸で失神している香織を抱き上げ、バスルームに向かった。

「大人の女って、すごくエロイ身体しているね」

香織の下半身をシャワーのお湯で洗いながら美佐が、感心したように言った。指先を膣口に差し込み、感触を確かめていた。

「アンタの身体の方がエロイは」

香織の乳房を石鹸のついたスポンジで洗っている里香が、からかう様に言った。乳房を洗いながら、乳首を吸ったりした。

「ちょっと、シャワーを貸して」

里奈が美佐からシャワーを受け取り、ヘッドの部分を外してから、ホースの先端部分を香織の膣口に差し込んだ。すぐに膣口から温水とともに白濁した液体が噴出してきた。赤く腫れ上がったアヌスにも同様な処置を行った。

「奴らの汚い精液を洗い流さなくちゃね。ちょっとアンタ達何やっているのよ！」

美佐と里香が、床に尻をついた隆一に纏わりつき、男根を奪い合っていた。

「里奈。何とかしてくれよ」

隆一が情けない声を出した。美佐が隆一の男根を呑み込んでいた。

「仕方無いわね。先生の身体はきれいになったわ」
里奈が隆一に近付き、股間を顔に押し付けるようにした。
「私のここもきれいにして」
里奈が甘えた声を出した。高校生とは思えぬ、豊かな尻を妖しくくねらせた。

「随分と時間が掛ったじゃないか」
部室で隆一達を待っていた部長の大輔が、不満そうな顔で隆一達を出迎えた。
「色々とあってね。先生はベッドで眠っているわ」
里奈が洗い髪をタオルで拭きながら、男達に説明した。
「おい。隆一。どうしたんだ？何かやつれたみたいだぞ。それに髪も濡れているし。もしかして、お前俺の里奈ちゃんと……」
大輔が唾を飛ばしながら、興奮した面持ちで言った。
「アンタには関係ないでしょう。あんまりシツコイと辞めちゃうわよ」
里奈が腕組をして大輔の顔を睨みつけた。

「ご・ご免。お願いです。部を辞めるなんて言わないで下さい」
大輔が里奈の前で土下座して、頭を床に擦りつけた。
「わかったら、それでいいのよ」
里奈が大輔の頭の近くに屈みこんで、頭部を優しく撫でた。
「里奈。大輔が覗いているわ」
美佐が言うとおり、大輔がスカートの間に見える股間を食い入るように見詰めていた。里奈はパンティを穿き忘れていたのだ。
「オリコウサンにしていたご褒美よ」
里奈はスカートで大輔の頭を包み込んだ。
「幸せであります！何ていい匂いなんだ」
「駄目よ。誰が舐めていいなんて言ったのよ！」
里奈が大輔の顔を裸の尻で踏みつけにした。床の上に大の字になり横たわる大輔の股間が大きく膨れ上がっていた。

第一章　魔性の女教師

「さあ、皆。ここは危険だから、安全な場所に移動するのよ。最初に女子生徒からよ。ついて来て」

三年B組の担任教師である大石怜奈が教壇に立ち、女子生徒達を誘導し始めた。残された男子生徒達が不安な表情で女子生徒達を見送った。

怜奈は二十六歳独身で、校内では英語教師の香織と人気を二分するほどの美貌を持っていた。

「どこに避難するんですか？」

クラス委員でミスコン経験者の真木瞳が、怜奈の前に立ち尋ねた。

「黙ってついてくればいいのよ」

普段は温和な怜奈が、氷のように冷たい視線を瞳に向けた。瞳は怜奈の様子に言い知れぬ恐怖を覚えた。

五分後、三年B組の女子生徒達二十人が、怜奈が管理する生物実験室に誘導された。

「こっちよ」

徒全員が、生物実験室の隣室に導かれた。そこは、両側が大きな棚になってい

て様々な動物の剥製が置かれていた。誰もこの部屋に足を踏み入れてはいなかった。

その部屋の奥にドアがあり、そのドアを開けると三十畳ほどの部屋があり、部屋の半分のスペースは頑丈な鉄格子で仕切られていた。動物でもそこで飼っていたのだろうか？辺りに獣臭が漂っていた。

怜奈は皆を全員鉄格子のある部屋に入れた。鉄格子には扉があり、怜奈は扉を開けて、まず自分から鉄格子で仕切られたスペースに踏み込んだ。

「貴女達もここに来て」

「どうしてこんなところに？」

真木瞳が再び質問した。

「工藤亮介が暴れているという情報があるのよ。ここは鍵がかけられるから安全なの」

「瞳。先生の言うとおりにしましょうよ」

クラス一の秀才である葵が瞳の腕を引いた。

「わかったわよ。そんなに強く引っ張らないで」

渋々ではあるが結局全員が、鉄格子で仕切られたスペースに入った。

生徒が全員入ったのを確認してから、
怜奈は扉から外に出て、持っていた鍵で施錠した。
「何をするんですか！」
瞳が鉄格子を両手で掴み、怜奈を睨み付けた。
「だから、ここが安全な場所だって言っただろう。さあ、ぼさっとしてないで着ている服を脱ぐんだよ」
怜奈の態度が急変した。氷のように冷たい笑みを浮かべて皆を見詰めた。
「今、何て言ったんですか？」
「だから服を脱いで素っ裸になれと言ったのさ」
「……」
全員が声を出すことも忘れていた。怜奈の言葉と態度がまったく理解できなかった。
「言うことがきけないんなら、仕方が無いね」
怜奈は全員を睨み付けるようにして、外に出て行った。五分ほどで、大きなバケツを持って戻ってきた。
「お前達が大好きな物を持ってきてやったよ」

　怜奈はバケツの口に片手を入れ、何かを取り出した。それは、長さ二メートルほどもある青大将だった。

　それを目にした途端、生徒達は絶叫し、泣き喚いた。

　怜奈は満面の笑みを浮かべながら、檻の中に一匹目の蛇を入れた。檻の中では生徒達が泣き喚きながら、蛇から逃れるように奥に避難した。

　怜奈は笑いながら、次々とバケツから蛇を取り出して、檻の中に放した。

　檻の中はパニック状態になっていた。

「先生。止めて。何でも言うことを聞くから」

　瞳が泣きながら、怜奈に懇願した。

「じゃあ、早く裸になるんだ」

　瞳は蛇を避けるように壁にへばり付き、セーラ服を脱ぎ始めた。

「パンティもブラジャーもだよ。グズグズしているともっと蛇を放すよ」

　コンクリート製の床の上には、十匹あまりの蛇がトグロを巻いていた。生徒全員が嗚咽に咽びながら衣服を脱いで全裸になった。生徒達は恐怖のあまり腰が抜けた状態で身動きもままならなかった。

「最初から言うことを聞けばね。怖い思いしなくても良かったのにね」

怜奈は、バケツを置いて、棚の上に載っていた木箱を下ろし、蓋を開けて中から手錠や首輪を取り出した。

三十分ぐらいの時間をかけて、女子生徒二十名の腕を後ろ手にさせて手錠で拘束し、赤い首輪を取り付けた。女子生徒達は蛇のショックが抜けず、茫然自失で佇んでおり何の抵抗も示さなかった。怜奈は生徒達の乳房や尻を触り、膣に指を入れ楽しんでいた。

「若い娘は本当にいいね。ああ、そうだ。そろそろ、ジョンの食事だね」

怜奈は壁掛け時計に目をやり、独り言を呟いてから、近くにいた後藤利恵の腕を引いて檻から出て行った。中肉中背で乳房が大きく可憐な顔立ちをした利恵の白く盛り上がった尻が無残に震え慄いていた。

「ジョン出ておいで。美味しい肉をやるから」

生物教師の怜奈は、利恵の裸身を背後

から片腕で抱きながら、広さ百畳ほどの室内に作られたプールを覗き込んでいた。利恵は手錠と首輪を外されていた。

水面は一面、水草に覆われていた。

突然、水草が周囲に飛び散り、巨大なワニが水面から顔を出した。それは体長七メートルほどもあるイリエワニだった。

「キャー！」

利恵が絶叫し、怜奈から逃れようともがき出した。

「どうだい。ジョン。美味しそうなお肉だろう。とっても柔らかいよ」

怜奈は表情ひとつ変えずに、利恵をプールに突き落とした。利恵はワニから逃れようと、水草の生い茂る水面を必死に泳いだ。もう少しで這い上がろうとした時、巨大な口が利恵の裸身を咥え込んだ。ワニが天井を向いて口を大きく空けた。利恵の裸身は今まさに呑み込まれ様としていた。頭部が喉の奥に消え、豊かな尻から下が口から食み出していた。利恵は生きたまま呑み込まれる恐怖に失禁していた。尿が噴水のように股間から噴出していた。一瞬後、利恵の裸身はワニの胃袋へと消えた。

「満足したようだね」
怜奈は、水面に目を閉じて浮かんでいるワニを満足そうに見詰めていた。

その頃、工藤亮介は、図書室で柔道部や空手部それにレスリング部の部長達と密談の最中であった。入り口では、ドスを手にした亮介の手下達がガードしていた。亮介の体躯に劣らぬ屈強な肉体の持ち主ばかりだった。
「相談というのは、俺の手下にならないかってことだ。只とは言わない。食い物といい女を分け与える」
「女だって。本当なのか？」
柔道部の苅谷が、身を乗り出してきた。他の二人も目を輝かせた。
「おい、大樹。女を連れて来い」
「へーい。了解しやした」
頭部を五厘刈りにして眉毛を剃った少年が、全裸の女達三人を紐で数珠繋ぎにして現れた。
女達の二人は女子生徒で、残るひとりは事務員の安田恵だった。女子生徒達は二人とも美しい容姿をしており、事務員の恵も短大を卒業したばかりの二十歳と

いう若さであり、可憐な顔立ちに豊かなプロポーションの持ち主だった。三人の女達は激しい陵辱を受けたばかりなのか、呆然とした表情をしていた。

「本当にこの女を貰えるのか？」

「当たり前だ。好きなだけ抱けばいいさ」

「どうする？」

三人の部長達は互いに見詰め合い暫し沈黙した。

「食い物と女というのは、魅力的な話だな」

空手部の青田が、沈黙を破った。

「決まりだな。これから部員達を連れてきてくれ。皆、面倒見るぜ」

「部員にも女と食い物を？」

「当然だ。お前等にはこれから十分に働いて貰わなきゃならないからな」

亮介は自分の右腕に巻かれた包帯を見詰めた。改造ガンで隆一に撃ち抜かれた傷だった。千切れた耳朶も癒えていなかった。

「部員達を連れてくる前に、いいか？」

レスリング部の大森が立ち上がり、恵の盛り上がった白い乳房を鷲掴みして、空いている方の手を股間に差し入れ、膣

内をかき回した。恵が下を向いて、嗚咽を漏らした。盛り上がった白い尻が無残に震え慄いていた。

「いいぞ。楽しめばいい」

残る青田と苅谷が、ふたりの女子生徒達に襲い掛かった。泣きじゃくる女達を肩に担ぎ上げ、三人で図書室の奥に消えた。すぐに女達の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。やがてそれは喘ぎ声に変わった。

生物教師の怜奈は、イリエアワニのジョンに餌を与えてから、女達を閉じ込めている部屋に戻った。

「利恵はどうしたの？」

瞳が檻の中から、怜奈の顔を睨み付けた。

「どうでもいいだろう。どうせ、お前達も同じような運命を辿るのさ」

怜奈は不気味な笑みを浮かべながら、鍵を開けて瞳の腕を掴んだ。

「何をするの！放して！私に触らないで！」

「言うことを聞かないと蛇を持ってくるよ。そいつの鎌首をここにいれてやろうか？あいつら暗くてじめついた場所が好

きなんだよ」
「嫌よ。蛇は堪忍して」
蛇と聞いて、瞳は大人しくなった。
「明美。お前も来るんだよ」
怜奈は、瞳に負けないくらいの美貌を持つ、明美の腕を掴んだ。明美は俯いて震えているだけだ。
怜奈は二人を監獄から連れ出して、生物室に隣接する宿直室に引き摺り込んだ。
広さ八畳ほどの宿直室には、全裸の男ふたりが、壁際に正座していた。
「お帰りなさい。怜奈女王様」
ふたりの男達が怜奈に向かって深々と頭を下げた。瞳は男達の顔を見て、絶句した。ふたりとも教師だった。ひとりは五十代半ばになる教頭の大田で、でっぷりと太っており、頭部が禿げ上がっていた。もうひとりは体育教師の新庄だった。年齢は三十代半ばであり、筋骨質の逞しい肉体に、目鼻立ちの整った美しい顔立ちをしていた。
「二人ともいい子にしていたようだね。ご褒美をあげなくちゃね。豚野郎！尻を見せな！」
「有難き幸せにございます」

教頭の大田が、怜奈に汚い尻を向けた。毛深い尻は、鞭で打たれたものか、激しい水脹れになっていた。怜奈が皮製の鞭を振り上げた。唖然とした表情で見守る瞳と明美の目前で怜奈は嬉々とした表情で鞭を振り続けた。大田は歯を食い縛り、激痛に耐えていた。皮膚が破れ、血が床に滴り落ちた。

「満足したかい？」

怜奈は肩で息をしながら、大田の耳を掴んで耳元で囁くように言った。

「は、はい。怜奈女王様。大満足でございます」

「今度はもっと激しくしてやるよ。死んでしまうくらいにね。さあ、そこに仰向けになりな」

大田は、言われるままに床に横たわった。怜奈はスカートを捲り上げパンティを脱いで、大田の顔に跨り、ゆっくりと腰を下ろした。

「舐めておくれ」

すぐに膣を舐る卑猥な音が、宿直室に響き渡った。

「次は新庄君の番ね。こっちに来て」

「はい。怜奈女王様」

体育教師の新庄は、正座したままで怜奈の近くに擦り寄った。怜奈は、教頭の大田に膣やアヌスを舐られながら、新庄の股間に手を差し入れて、男根を掴みゆっくりと扱き出した。黒々として、極太の男根が怜奈の手の中で大きくなっていく。

勃起した男根を美味しそうに頬張り、舌先で亀頭を刺激した。新庄は余程気持ちがいいのか、歯を食い縛るように射精を我慢していた。

怜奈は暫くフェラチオを続けた後で、愛しげに男根を扱きながら、新庄の唇を奪い、舌を吸い出して存分に舐めた。十分に男根を扱いてから、新庄を仰向けにさせて、屹立した男根に跨り、膣で咥え込んだ。

怜奈は、新庄の舌を吸いながら、激しく腰を振り出した。数分後、新庄は女のような喘ぎ声を上げ、怜奈の膣に精液を吐き出した。怜奈も絶頂に達して、新庄の胸に突っ伏した。ふたりは重なり合い、暫しの間、余韻を楽しんだ。

「豚野郎。私のマ＊コをきれいにしておくれ」

教頭の大田は、ノロノロとした動作で起き上がり、怜奈の股間に口を付け、ズルズルと膣内の精液を吸出し、飲み込んで行く。

「終わったら。新庄君のもきれいにするんだよ」

大田は豚のように這い蹲りながら、新庄の股間に顔を入れ、男根を貪るように吸った。

新庄は黙って男根を与えるだけだ。大田は必要以上に男根を吸い続けた。新庄の表情が次第に蕩けていく。数分後、新庄の男根は大田の口内で弾けた。大田は嬉々とした表情で男根を吸い続け、精液を嚥下していく。

一方怜奈は、部屋の奥に敷いてあった布団に瞳と明美をうつ伏せに横たえ、ふたりの尻を交互に舐り始めた。ふたりと

も逆らおうとはしなかった。悪魔のような女を心底恐れていた。

「二十歳前の女の肌は最高だね。女の私でも惚れ惚れしちゃうよ」

怜奈はアヌスに舌を入れてきた。二人とも同性愛の経験は無かった。最初は同性に嬲られる屈辱に心が壊れそうになっていたが、次第に怜奈の巧みな舌使いに反応し出した。

半日後、生物教師の怜奈は、瞳と明美の手足を縛り、歩き出せないようにしてから当直室を出て、女子生徒達を監禁している牢獄に戻った。檻の中では生徒達十八名と研修生が肌を触れ合うようにして、部屋の隅に一塊となって震えていた。

今度は、新体操部に所属している佐々木エリを檻から連れ出した。エリは新体操で鍛えた滑らかな肢体を持ち、きれいな顔立ちをしていた。女子生徒達が監禁されている部屋にあるもう一つの扉を開けた。

内部は、いくつも鉄格子で仕切られた造りとなっていた。檻の中には、成獣のチンパンジーが五頭飼われていた。五頭

とも体長が百六十センチほどで、チンパンジーとしては、かなり大柄だった。

五頭のチンパンジー達は、エリの裸身を見て檻を揺さぶり、何度も飛び跳ね騒ぎ出した。

「そんなにこのお肉が気に入ったのかい。いっぱい食べるんだよ」

怜奈は、檻の扉を開けて、蒼白な表情をして呆然と佇むエリを内部に押し込み扉を閉めた。

「いや！」

エリはチンパンジー達から逃れようと、必死に扉を開けようとした。一頭のチンパンジーがエリに背後から襲い掛かった。

そのチンパンジーはエリを四つん這いにさせて、尻の割れ目に顔を入れて、膣やアヌスの匂いを嗅いだ。餌かどうか確認しているのだ。

他のチンパンジー達は、エリの裸身を食い入るように見詰めていた。口元には大量の唾液をたたえていた。

一頭のチンパンジーがエリに襲いかかった。エリの盛り上がった白い尻を鋭い

牙で噛み裂いた。

「ギャー！」

エリの絶叫が檻の中に響き渡った。他のチンパンジーも一斉にエリの裸身に殺到した。全身を震わせ、泣き叫ぶエリのむっちりとした太腿や豊かな乳房に鋭い犬歯を突き立てた。

五頭のチンパンジーがエリの手足を掴み、強く引っ張った。一瞬で手足が引き千切られた。エリは出血多量によりショック死した。

手足を失った胴体には二頭のチンパンジーが、群がり一頭は柔らかい腹部を噛み裂いて血まみれの内臓を手で引きずり出して、貪り食らった。もう一頭は、尻の肉を噛み裂いては、租借し呑み込んだ。残りのチンパンジー達は、手足に喰らいつき肉を頬張った。

檻の中では、チンパンジー達が、狂ったようにエリの肉を貪る音が響いていた。

怜奈は檻の外で椅子に腰掛け、自慰をしながらエリが貪り喰われる様子を見ていた。

数時間後、玲奈は宿直室から瞳を連れ出した。瞳は、それまでの間、玲奈や新庄に犯されどおしで、何度も逝かされ続けていたため、憔悴仕切っていた。逃げ出す気力も無く、全裸で玲奈の後ろに続いた。

玲奈は瞳を生物実験室に連れ込み、実験台に、仰向けの姿勢で横たえた。

玲奈は白衣を脱いで全裸になった。股間には禍々しい感じがする張形が固定されていた。目の前にむき出しになっている瞳の股間に喰らいついて、音を立てて膣を舐り始めた。瞳の白い裸身が、玲奈の舌の動きに合わせるように揺れ動いた。

瞳は同性であり、しかも教師である玲奈の愛撫に溺れそうになっていた。

玲奈の柔らかい舌でクリトリスを刺激される度に快感が背筋を走り抜けた。

喘ぎ声が実験室に響いた。

今度はうつ伏せにされ、盛り上がった白い尻を両手で鷲掴みにされ、左右に開かれた。すぐに柔らかい舌がアヌスに押し当てられた。瞳は思わず、喘ぎ声を漏

らした。玲奈の舌は、アヌスをこじ開けようとするかのように、執拗に動いていた。瞳はあまりの快感に嗚咽を漏らしていた。玲奈の顔を尻の割目で挟み込みながら軽いアクメに達した。

すぐに脇腹を両手で引き上げられ、背後からムキ卵のようにすべすべの尻を抱かれた。巨大な張形が瞳の膣口に突きたてられた。瞳は思わず背筋を仰け反らせていた。

膣を犯されながら、白魚のような指先でクリトリスや乳首に刺激を与えられた。凄まじい快感に意識を失いそうになった。不意に髪を引かれ、顔を後ろ向きにされ舌を吸い出された。瞳は舌を吸われながら、膣壁を張形で擦られ、指先でアヌスを貫かれた。

一瞬で絶頂に達し、玲奈の腕に抱かれながら全身を仰け反らせた。

玲奈は氷のように冷たい笑みを浮かべながら、瞳から離れた。瞳の四肢を紐で実験台に縛りつけ、自由を奪った。

実験台の上に置かれていたガスコンロ

に点火した。コンロの上には、水を満たした金属製の洗面器が載せられていた。
それから、薬品保管用の冷蔵庫からポン酢の小瓶と小鉢を取り出して、小鉢にポン酢を満たした。さらに薬品庫からエチルアルコールのビンを取り出して、コップに注ぎ水で薄めた。

手術用のメスを持って瞳の横に立った。
「夕食は美少女の柔肉シャブシャブと言ったところだね」
玲奈は冷たい笑みを浮かべながら、空いている方の手で瞳の寝ていても崩れない乳房を鷲掴みにした。
「何なんですか？それでどうしようと言うのですか？」
瞳の視線は玲奈が持つメスに釘付けとなっていた。
「これかい。手術用のメスに決まっているだろう。人間の皮膚なんて紙のように切れちゃうんだよ。どこから食べようかね」
「食べる？私を食べるというのですか？」
「当たり前のこと聞くんじゃ無いよ。お

前だけじゃないよ。明美は明日のディナーにすると決めているんだ。あの娘も、ああ見えて結構いい身体しているからね。ステーキにしようと思っているのさ」

「狂っている……」

「食べ物が無いんだよ。仕方が無いじゃない。さあ、お喋りの時間は終わりだ」

「いや！止めて！」

瞳は髪を振り乱し、絶叫した。

玲奈は表情ひとつ変えずに、瞳のむっちりとした太腿にメスを突き立てた。

「ギャー！」

白目をむいて身悶えする瞳の太腿を縦に切り裂いていく。皮膚の下から現れた脂肪を切り裂き、赤みの肉を一塊切り取って、実験机の上に置いてあったまな板でスライスした。それを箸で摘んで、洗面器の熱湯に潜らせ、ポン酢をつけて口に入れた。

「最高だね。美少女の肉がこんなに美味しいとはね。眩暈がしそうな味だよ」

実験机の上で、白目をむき意味不明の言葉を吐き続ける瞳に笑いかけた。

それから玲奈は、瞳の腿肉数百グラムを平らげてから、徐にクリトリスをメス

で切除し生のまま口に放り込んだ。

「コリコリとして乙な味じゃないか」

満足げな笑みを浮かべながら独り言を言い、今度は瞳の柔らかい腹部を縦に切り裂いていく。黄色い脂肪層の下から現れた内臓を手で掴み出した。血塗れの肝臓を取り出して、メスでスライスしてから、生のまま口に入れた。

「本当に最高だよ！新鮮なレバーは！」

感嘆の声を上げて、コップのアルコールを一気に飲み干した。

玲奈は、出血多量で絶命した瞳をうつ伏せにさせて、盛り上がった白い尻にメスを突き刺し、肉を切り取る作業を始めた。作業の合間にエチルアルコールをコップに注ぎ、水で薄めてから、今度はゆっくりと味わうように飲んだ。

玲奈はそれから、数時間をかけた極上の裸身を解体していった。

第二章　食料探し

「里奈。何か食べる物は無いのか？」

隆一が、パソコンを覗き込んでいる里奈の肩に手を当てた。

校内に閉じ込められてから既に三日が経過しており、部室の冷蔵庫に保管されていた僅かな冷凍食品を五人で少しずつ食べてしのいでいたのだ。

時刻は午後三時を過ぎており、今日は朝から何も食べていなかった。それは他の皆も同じだった。

「今探しているところよ。この学校には、長期間の閉鎖に備えて大量の食料がストックされている筈だわ」

「どうやって探しているんだ？」

いつの間にか、部長の田端大輔が隆一の隣で、液晶ディスプレイを見詰めていた。

「校内サーバにハッキングしているところよ。外部とは接続していないからセキュリティ対策がまるでなっていないの。だから朝飯前というわけ。これだわ！」

里奈の弾んだ声に、皆の視線が集中した。

「加藤君。プロジェクタの電源を入れてくれない。里香ちゃんは照明を消して」

室内が暗くなり、プロジェクタからの光が壁に張られたスクリーンに投影された。プロジェクタは里奈が操作している

パソコンにケーブルで繋がっていた。
すぐにスクリーンに校内の間取と思われる図面が映し出された。
「どうやら、十箇所の食料庫が隠されているようだわ」
里奈がマウスとキーボードを神業のように目にも止まらぬ速さで操作していく。
「全部でどれくらいの食料がストックされているかわかるか？」
隆一が里奈の肩越しからスクリーンを見詰めていた。
「ちょっと待って。これだわ。凄いわよ。米に小麦粉が五十トンに冷凍食品が一万食分に、それから、数え切れないくらいよ。飲料水も膨大な量が保管されているわ」
「つまり、今、閉じ込められている人数分以上はあるという訳か？」
隆一が照明のスイッチを入れながら里奈に聞いた。
「十分過ぎるくらいよ。何年でも持ちそうね」
「場所は校内に分散しているようだな。取り敢えず一番近い場所に行ってみるか」

「ひとりで行くのは危険よ。工藤達が校内を荒らしまわっているわ。ほとんどの生徒が工藤達に捕まって、どこかに閉じ込められたようよ」
「無事なのは俺達だけというわけか」
「そうよ。誰も助けに来てくれないわ」
「でもここに居ても飢え死にするだけだからな」
隆一は、防弾ベストを着て、改造モデルガンをヒップホルスタに差し、レーザ銃を肩にかけた。
「私も行くわ。銃ならまだあるし、それに倉庫は鍵が掛けられているかも知れないわ。私になら解除の仕方を調べられるわ」
里奈はパソコン机の奥から二挺の改造モデルガンとフォルダ付きベルトを取り出し、モデルガンをフォルダに挿入し、セーラ服のスカートに装着した。
「危険過ぎる」
「自分のことは自分で守るわ。それに工藤達は女の私ならすぐには殺さない筈よ。貴方がだめと言っても絶対に行くわよ」
「工藤は君を殺さないけど、絶対に好きなだけ……。後は言いたくないな。香織

先生のことを見ただろう？先生はショックでまだ眠ったままだよ」

部長の大輔がふたりの間に割って入った。

「アンタの言うことなんて聞くと思うの？」

里奈は大輔に詰め寄り、可愛い顔で睨み付けた。大輔は口をパクパクさせるだけで何も言えない。

「わかったよ。だけど、パンティだけは履いて行けよ」

隆一が大輔に助け舟を出した。気丈な里奈を説得するのを諦めたのだ。里奈のスカートが捲くり上がり、ムキ卵のようにすべすべで、シミひとつない尻が見えていた。

「そうだ。パンツを履くのを忘れていたわ。隆一、ちょっと待っていて」

里奈は、数時間前に手洗いでパンティを洗い、室内に干していたのだ。パンティの予備など持ち込んでいなかったので、女子生徒は毎日のように手洗いで洗濯をしていた。皆の前でパンティにきれいな足を通し始めた。大輔と加藤が目を皿のようにして見詰めていた。

パンティを履き、モバイルパソコンをリュックに入れて背負った。それからハサミでスカートの裾を切り始めた。動き安いように尻が見えそうな超ミニスカートに作り変えたのだ。

「大輔。皆のことを頼んだぞ」

「隆一。帰って来てね」

美佐と里香がすがり付く様にして隆一の両袖を引いた。

「美味しい夕食を期待していてくれ」

日中戦争が勃発し、生徒達が校内に閉じ込められてから、既に三日が経過しようとしていた。

「どうだ？壮観な眺めだろう？並以上の女を百人集めたんだ」

亮介が新たに子分とした格闘技系クラブの猛者達三十人を広さ数百坪はある屋内プールに案内した。皆、満足に食べてはいないようで、窶れが目立っていた。プールサイドには大勢の女子生徒や若手の女性教師や研修生が全裸にされて、後ろ手を縛られ横たえられていた。

「室内は二十六度に保たれているから、女達が風邪を引くことはないんだ。それ

にプールだと常に身体を清潔にできるからな」

「何故、女達を縛っているんだ？出口に鍵を掛けておけば逃げられることもあるまい」

柔道部主将の苅谷が、近くに横たえられている女子生徒の尻を食い入るように見詰めながら尋ねた。

「女達に与えられる食料は限られているからな。身体を動かさないようにするためさ。脂肪が落ちてしまうだろう」

売店から略奪した菓子パンは残り少なかった。

「お前、本気で女達の肉を食う気か？」

苅谷がまじまじと亮介の横顔を見詰めた。

「食う物が無いんだ。仕方が無いだろう。今夜当たり、事務員の恵を食おうと思っているんだ。味を確かめてから、本格的に肉を調達するつもりだ。並以下の女達百人を格技室に閉じ込めている。顔が多少不細工でも女は女だからな。それだけいりゃあ、ひとり二十キロの肉が取れるとして、二トンはいけるぜ。何年も大丈夫だ。お前達も付き合えや」

亮介はプールサイドに横たわる恵の盛り上がった白い尻を見詰めながら言った。
「俺は食うぞ。こんな場所で死にたくないからな。それに恵を抱いてわかったんだが、あの女の肉は柔らかいぞ。脂が載って美味いんじゃないかな」
空手部主将の青田が、淫らな笑みを浮かべながら、恵に近付き肩に担ぎ上げた。
「食う前にもう一度犯らせてもらうぜ」
「お前も好きだな。今日はこれで五回目だろう？」
「ああ、この尻を見ろよ。何度でも抜けるぜ」
「じゃあ、俺達も休憩するか」
亮介が近くに横たわっていた学園で一、二を争うほどの美貌を持つ女子生徒の佐伯涼子をうつ伏せにさせ、深い尻の割れ目に顔を入れた。それを合図に子分達が一斉に女達に襲い掛かった。
隆一と里奈は照明が壊され、非常灯のみの暗い廊下を寄り添うようにして歩いていた。二人とも改造モデルガンを手にしていた。
「後、十メートルほど進んだ場所に食料

庫へと続く入り口がある筈だわ」
里奈は、モバイルパソコンを覗き込んでいた。
「工藤達の姿は見えないようだな」
「あいつら、もっぱら地下二階で活動しているようよ」
「ここは地下三階だからな」
「二階を完全に制覇したら、やってくるわよ」
「その前に食料を確保して、部室に篭城しなきゃな」
「ここだわ」
里奈が、隆一の手を引き、立ち止まった。
「入り口なんて、ないじゃないか」
隆一は、辺りを見回した。
「おかしいわね。地図にはここが入り口となっているのよ」
里奈は可愛いく小首を傾げた。
「あっ……。もしかして、これが入り口なのか！」
隆一が天井を見詰めていた。天井には、点検用の扉が設けられていた。人一人が何とか、抜けられそうな幅だった。扉は閉められていた。

「そうね。でも何でこんなに目立たなくしているのかな」
「ここを設計した奴等は、全員を助けようとはしていないようだな」
「理由は後でゆっくり考えましょう。隆一。肩車して。扉に取手があるから、開けてみるわ」
「お安い御用だ」
隆一は里奈の太腿の間に首を入れ、肩に担ぎ上げた。ミニスカートで視界を遮られた。
むっちりとした太腿と柔らかい下腹部の感触に股間が熱くなった。パンティは履いているが、若い女の素晴らしい匂いに思わずため息を漏らしそうになった。隆一も里奈が極上の女だと認めていた。
「鍵はかかっていないわ。開いたわ。もう少し上に上げてくれない」
「大丈夫なのか？俺が先に行こうか？」
「これくらい平気よ」
隆一は里奈の尻と太腿を掴んで上に持ち上げた。エリは天井に開いた入り口の中に入って行った。
「中はどうなっている？」

「結構広いわよ。隆一も上がってきて」
隆一は、ステップ無しに飛び上がった。入り口の端を掴み、一気に自分の体重を持ち上げた。
「天井の上に、もうひとつの廊下が作られているとわな」
「どこまで続いているのかしら」
「兎に角、食料を探そう」
「そうね。ここから、二十メートルほど進んだ場所にある筈よ」
ふたりは、慎重な足取りで廊下を進みだした。すぐに鋼鉄製のドアがある場所に着いた。
里奈はドアノブを回してみた。
「どうやらここのようね。でも鍵が掛かっているわ。デジタル式の鍵で四桁の暗証番号を入力するタイプね」
「これだけ頑丈だと力尽くで、開ける事は難しいな」
「ちょっと待っていて」
里奈はナップザックから、接続端子がついたコードを取り出して、デジタル錠とモバイルパソコンを接続した。
「開いたわ」
パソコンを操作してから二、三秒も立

っていなかった。
「凄い。大泥棒にもなれるな」
「そんなこといいから、早く開けてみて」
「そうだな」
隆一は里奈を背後に庇うようにして、改造モデルガンを手にして、空いている方の手でドアノブを回した。
「暗くて何も見えないわ」
「これでどうだ？」
隆一が手探りで照明の壁スイッチを押した。
「何なのこれ？全部食料なの？」
ふたりの前には、広さ百畳以上の空間が広がっていた。室内には無数の棚があり、それぞれにはダンボール箱が並べられていた。
「見ればわかるさ」
隆一は近くにあった棚からダンボール箱を抜き出して、床に置きナイフを使って蓋を開けた。中から、様々なタイプのレトルト食品が出てきた。
「ビンゴね」
「ああ、里奈のお陰で飢え死にしなくてよさそうだ」
「ここにあるのはすべて、レトルト食品

ばかりなのかな」
「俺は血の滴るようなステーキを食べたい気分なんだ」
「奥にあるのは冷蔵庫じゃないかしら」
「行ってみよう」
食品保存室の奥には、巨大な業務用冷凍庫が置かれていた。扉を空けてみると大量の冷気が噴出した。
「この冷凍庫は、食材を長期間新鮮なまま保存できるタイプね」
「磁気をかけながら冷凍するってやつか？」
「そのとおりよ。隆一って、意外と物知りね」
里奈は冷凍庫から新鮮な牛肉のブロック肉を取り出した。
「すげえ。こいつはマグロなのか！」
隆一が長さ一メートルほどもある冷凍マグロが保存されているのを見つけた。
「大宴会が開けそうね」
「部室から、こっちに引っ越した方が良さそうだな」
「確かにここだと、入り口は頑丈だし、食料も心配無いけど。トイレやシャワーが無いわ」

「そうだな。水周りは必要だな。でも、待てよ。この冷凍庫には生の食材が大量に保存されているよな。ということは調理する場所も用意されているんじゃないか」
「そんな都合の言い訳、あるわけ無いじゃない」
「そうでも無さそうだ」
隆一が冷凍庫の陰に隠れて見えなかった扉を見つけた。
「何？どうしたの？」
「こっちに来て見ろよ」
里奈は、隆一が開けている扉の奥を見詰めた。
「何なのこれは？」
「これで決まりだな。皆をここに呼ぼう」
新しく見つけた食料倉庫の奥にある部屋には、バス・トイレやベッドルーム等が完備されていた。
「考えてみれば当然のことね。学校は本来、長期間寝泊りできるような施設は完備されていないわ。でもシェルターとして使用するなら、食料や寝室が必要になるわ」
二人は食料倉庫の調査をひととおり終

えてから、物理化学部の部室へと向かった。

第三章　人肉料理　へと続く